

# 鳥取県内におけるヘルパンギーナ患者からの コクサッキーウイルスA4型分離状況

佐倉千尋 加藤喜幸 竹内功二

国立感染症研究所病原微生物検出情報, Vol. 35, 9月号, 217-218(2014)

鳥取県内の定点当りのヘルパンギーナ報告数は、2014年6月中旬頃から著明に増加し、25週には警報の基準となる一定点当たり6人を超えた。

この2014年のヘルパンギーナの流行ウイルス株の性状を調べるため、2010年から2014年に、鳥取県内の医療機関を受診したヘルパンギーナ患者の咽頭ぬぐい液から分離されたウイルスについて解析を行った。患者検体は前処理後、RD細胞に接種し、エンテロウイルスに特徴的なCPEが確認された培養上清を回収した。この上清からRNAを抽出後、エンテロウイルスのVP1領域をRT-PCRにより増幅した。700～800bpのPCR産物を確認後、ダイレクトシーケンス法により塩基配列を決定した。

2010～2014年において、県内のヘルパンギーナ患者検体からは計21種のウイルスが分離された。例年、コクサッキーウイルスA群（以下CAVという）が60%以上の割合を占めており、全国の流行と類似した傾向を示している。CAV4型は、県内で2014年に67%分離された他、2010年に20%、2012年に46%が分離され、全国での分離・検出割合と同様の傾向であった。CAV4型やCAV6型等の流行は、全国的にも隔年に起きている。このことから、特定の型のエンテロウイルス感染による抗体の獲得は、同一型のウイルスによるヘルパンギーナの発症を、ある程度の期間は抑制すると推測される。

2010年、2012年および2014年に鳥取県で分離されたCAV4型15株について、CAV4型標準株、その他過年の国内外株と共にVP1領域の系統樹解析を行った。その結果、2014年株は2010年ならびに2012年株とは異なる系統を示した。一方、それぞれの年については、同一年の分離株の相同性は極めて高いことが分かった。